

白山ふるさと文学賞

第八回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年小説の部 優秀賞

# マイ フレンド

広陽小学校五年

西<sup>にし</sup>

藍花<sup>あいか</sup>

私、中原りさ。あることで後悔している。

おさななじみの坂井鈴音は、近所に住んでいて、物心がつくころからずっといっしょに遊んでいて、やさしく親切な子だった。私たちは、服だったら同じようなデザインが好きだったり、曲だって同じミュージシャンの曲ばかり聞いていて、

「気が合うね。」

とよく言っていた。遊びに行く時も買い物に行く時も、いっただっていっしょだった。

そのくらいとても仲が良かったから、鈴音のことはすべて知っていると思っていた。だが、ここ最近鈴音が、

「今日、いっしょに帰れなくなっちゃった。本当にごめん。」

そう言ってくれ一人が帰ることが、少しずつ多くなっていた。今日もいっしょに帰れなくて、一人で学校から家まで帰っていると、スーパーから鈴音と、となりのクラスのおんなちゃんという子がいっしょに出て来たのを見た。いっしょに帰れない理由を聞きたくて、その次の日聞いてみることにした。

そして今日も、帰れないと言って走り出そうとするのをとめて、思いきって聞いてみた。

「待って、鈴音。」

「え！うん。どうしたの。」

「あの、最近いっしょに帰れないこと多くない？どうしたの？何かあったの？私たち友達じゃない。」

と、心の奥底のいやもやした気持ちがあふれるように、いっきに聞いた。「私…。今おかし作りにはまって、ずっと前おんなちゃんにもらったカヌレがすごくおいしくて、それが手作りだって聞いたらすごくおどろいちゃった。そしたら、おんなちゃんが作り方を教えてくれるって言って放課後おんなちゃんの家に行ってるの。ずっといっしょに帰れなくてごめん。」

それを聞いた私は、一人暗やみにとり残されたような気持ちになった。

「そうなんだ。いいよ。気にしないでがんばって。」

私は、少し悲しかった。鈴音のことは当たり前のように、知らないことはないと思っていたのに、知らないことがあったのが、私はとても悲しかった。その次の日、私は鈴音とあまりしゃべらなかつた。だんだん鈴音をさけていくようになり、いつの間にか鈴音以外の友達と過ごすようになった。

あの日から私は、パズルのピースを一つなくしたような気持ちのまま、三年、四年と進級し、五年生の時には鈴音は親の仕事の都合で、転校して行ってしまった。

そして、中学生になった私は意外なところで新事実を知ることになる。それは、学校の帰り道、同じ部活動をしているおんなといっしょに帰っている時だった。私は、

「明日は、一日練習でお弁当がいるよね。」とおんなに確認した。

「うん。じゃ、お母さんに私の大好きな大葉入りたまご焼きを作ってもらおうと。」

「あーおいしそう。」

「私ね…。今お母さんは元気だけど、昔はね、お母さんが病気でお母さんの変わりに、ごはんを作ってたの。でもね、お母さんみたいに上手に作れなかつたんだ。」

「へーそうなんだ。お母さん病気だったの。全ぜん知らなかつた。」

「そういえば、小学生のころ鈴音ちゃんっていう子がいたでしょ。私がお母さんのお見まいに持っていく予定だつたおかしがうまく作れなかつた時、手伝ってくれたの。そしたら次いつ持ってくるのか聞いてきたから毎日行く予定だけどって答えるといつも手伝ってくれたんだ。そのおかげもあって、お母さんの病気は少しずつ、回復していったんだ。」

「えっ鈴音は、おかしの作り方を教えてもらってたんじゃないの。」

「鈴音ちゃんはそう言ってたんだね。きっとあまり人には言わないでっ

て言ってたからだと思うよ。」

その時、私は体全体が固まった。今まで鈴音はあんなどおかし作りを楽しんでいたと思っていたのに、本当はこまっていたあんなお手伝いをしていたのだ。なぜあの時私は、鈴音から少しずつはなれていったのだろうか。あの時鈴音に何かかける言葉はなかっただろうか。そう思うと、自分をせめる気持ちがじわじわわいてきた。家に帰っても、あまり食よくもわかず早めに部屋にもどった。

ベットに転がったその時だった。ふわふわした物が、目に飛びこんできた。よく見ると人の良さそうなおばあさんがにこにこしてうかび上がっている。天じょうに写し出された映像みたいにすき通っていた。おどろいて見ていると

「何かなやみ事かい？」

その人が話しかけてきた。私は「えっ！だっだれですか。」

「私は、魔法使いエミリーさ。うかない顔をしているね。何かあったのかい。」

「それが…。私、後悔していることがあるの。」

と、鈴音と私にあった今までの出来事を話した。真けんに話を聞いていたエミリーという魔法使いが

「そしたら、過去に一度だけでもどしてやろう。ただし一時間以内に、解決しておいで。」

「はい。」

目を開けると、見なれた教室にいて五時間目のチャイムがなった。教室内で、終わりのあいさつをした。すると、だれかが私に話しかけてきた。

「りさ、今日も帰れなくなっちゃった。」

あの時だ。そうだ。いっしょに帰れない理由を聞いたあの日だ。今までずっと自分がどんな言葉をかけたら良かったのか何度も考えたしゆん間だった。ただ、鈴音がはなれていくのがこわくて意地をはっていただけだったと気付いた時には、もう鈴音は遠くなっていた。

「うん。分かった。鈴音が帰れるようになったら、またいっしょに帰ろう。でも、もしこまったことがあったら相談してね。私は、鈴音のことが大好きな友達だと思っているから。」

この言葉は、何度も伝えたかった私の素直な思いだった。

「りさありがとう。本当にこまった時は、相談するね。もう少しだけ帰れないけど、まってるね。」

この言葉を聞いたしゆん間、なくしたパズルの最後のピースを見つけた気分だった。私のずつと、後悔していたことをこんな形で解決させてくれた魔法使いエミリーに感謝して、心の底からありがとうと言ったところで私の記憶は消えた。

目が覚めると、自分のベットの上にあった。下からお母さんの声が聞こえた。

「りさ、いつまでねてるの鈴音ちゃんを迎えに来てるわよ。」

あわてて私は飛び起き、階段を駆け下りた。

「おはよう。りさ。今日部活だよ。」

頭の中が混乱していた。

「おはよう。鈴音。どうしたの。引っこしたんじゃないか。」

「えっ、何ねぼけてるのりさ。五年生の時、引っこしたけど中学生になってもどって来たじゃない。」

「そうだったね。」

と思わず私は言ったが、これはエミリーからのプレゼントだったのかもしれない。エミリーに出会ったことは、夢か現実かは分からないけど鈴音は近くにいます。

「私達、ずっと友達でいようね。」

朝の空気は、私達の笑い声を温かく包んでくれた。